

よかたせとわり
富山市四方背戸割遺跡
発掘調査報告書

—一般県道練合宮尾線道路総合交付金（住宅）付替農道工事に伴う発掘調査—

2013

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市四方荒屋地内に所在する四方背戸削遺跡の工事立会調査の発掘調査報告書である。
- 2 工事立会調査は、一般県道練合宮尾線道路総合交付金（住宅）付替農道工事に伴うものである。
- 3 工事立会調査は、富山県富山上木センターの委託を受けた富山土木株式会社が実施し、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの指導・監理の下で、有限会社毛野考古学研究所富山支所が調査を担当した。
- 4 工事立会調査日 平成 25 年 1 月 18 日
出土品整理期間 平成 25 年 2 月 22 日～平成 25 年 3 月 15 日
- 5 担当者 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 主査学芸員 鹿島昌也
富山土木株式会社 技士 大野清信
有限会社毛野考古学研究所 富山支所長 常深尚
- 6 本書の執筆は、第 1 章を鹿島が、それ以外を常深が担当した。各々の文責を文末に記した。
- 7 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

凡　　例

- 1 方位は真北、水平水準は海拔高である。
- 2 座標は世界測地系を使用し、座標系は第 VI 系である。
- 3 本書で使用した遺構略号は SD（溝）、SK（上坑）である。
- 4 土層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著（助日本色彩研究所）を使用した。

目　　次

| | | | |
|--------------|---|------------|---|
| 例言・凡例・目次 | 1 | 第Ⅲ章 調査の成果 | 4 |
| 第Ⅰ章 調査の経緯 | 2 | 第1節 基本層序 | 4 |
| 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 | 3 | 第2節 検出遺構 | 4 |
| 第1節 地理的環境 | 3 | 第3節 出土遺物 | 4 |
| 第2節 歴史的環境 | 3 | 第Ⅳ章 総括 | 5 |
| | | 写真図版・抄録・奥付 | |

参考文献

- 富山市教育委員会 1998 「富山市内道路発掘調査概要Ⅱ四方北庭遺跡」
富山市教育委員会 1999 「富山市四方背戸削遺跡発掘調査報告書」
富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 1999 「富山市四方荒屋遺跡発掘調査概要」
富山市教育委員会 1999 「富山市内道路発掘調査概要Ⅲ四方北庭遺跡」
富山市教育委員会 2004 「富山市打出遺跡発掘調査報告書」
富山市教育委員会 2006 「富山市四方背戸削遺跡発掘調査報告書」
富山市教育委員会 2008 「富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書」

第1章 調査の経緯

四方背戸割遺跡は、富山市教育委員会（以下、市教委と略す）が実施した市内分布調査（昭和63年度～平成3年度）により、新たに確認された遺跡である。以後、富山市遺跡地図に登載し、周知の埋蔵文化財包蔵地（市遺跡No.201015）として取り扱うこととなった。遺跡の推定面積は111,000m²であり、弥生時代後期、古墳時代前期、奈良、平安時代、中世の遺物が出土する集落跡である。

平成23年7月23日に富山市四方荒尾地内において、富山県富士木センター工務第三課環状線整備班（以下、県土木センターと略す）から一般県道連合宮尾線道路改良に関する道路拡幅工事及び付替農道工事に伴うボックスカルバート（以下ボックスと略す）設置工事にかかる協議があった。当該地は埋蔵文化財包蔵地、四方背戸割遺跡に該当することから、道路拡幅工事部分は試掘確認調査、ボックス部分については工事立会調査を実施することで協議が整った。

同年9月9日付けで、まず道路拡幅部分にかかる試掘確認調査依頼文が県土木センターから提出された。同月27日、200m²を対象に試掘確認調査を実施したところ、当該箇所には保護措置を講ずべき遺跡は所在しないことが判明した。

一方、ボックス部分については、県土木センターから工事着手前に連絡を受けることになっていた。ところが、着工について連絡がないので、平成24年2月28日に市教委から県土木センターへ確認したところ、翌日に回答があった。ボックス設置予定箇所の内1箇所については既に施工済みで、文化財保護法第94条に基づく通知が未提出であることも判明した。この事案については、口頭による厳重注意を行い、施工中の写真の提出をもって、掘削状況の確認を行った。

平成24年10月26日に県土木センターとの協議の席上、近日中に残りのボックス設置箇所の工事発注が行われる連絡を受けた。市教委は法第94条に基づく通知及び工事立会の監理依頼文を提出するよう指示をした。工事立会は県土木センターから工事（受注者：富士木株式会社）の中に民間発掘調査会社による工事立会を組込む形で発注し、有限会社毛野考古学研究所が受注した。

平成25年1月14日付で県土木センターから約30m²のボックス設置工事の工事立会にかかる監理依頼文が提出された。

同月18日、毛野考古学研究所から工事立会実施中に造構や古墳時代の土器などの遺物を確認したとの連絡を受けた。市教委職員が現地に向かい確認したところ、発掘調査による記録保存の必要性を判断した。



第1図 工事立会箇所と既往の調査区（富山市発行『富山市基本図』1/2,500）

その後、富山県教育委員会生涯学習・文化財室や県土木センターと協議をし、出土品整理から報告書作成まで工事に含めた形で追加発注することで合意し、同年3月15日まで毛野考古学研究所による出土品整理・報告書作成作業を実施した。

(鹿島)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

四方背戸割遺跡(1)は富山市北部の海岸部、四方荒屋地内に所在する(第2図)。現代の神通川の河口から南西2.1kmの距離にあり、海岸砂丘内側の低湿地に立地する。遺跡南側は神通川が現在の流路に変流する以前の旧流路に面している。標高は宅地で2.6m、水田で1.8mほどである。

第2節 歴史的環境

本遺跡の既往の調査(第1図)では、平成10年度調査で弥生時代中期後葉・後期後半の土坑・溝が検出されている。また平成17年度調査では弥生時代中期から古墳時代初頭の土坑・溝、中世の掘立柱建物跡などが検出されている。

四方地区では、本遺跡と同じく神通川の旧流路に北接する江代割遺跡(2)で弥生時代後期の溝、古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されている。本遺跡の北側に隣接する四方荒屋遺跡(3)では縄文時代後晩期の土器片が出土したほか、弥生時代から古墳時代の土坑、平安時代の掘立柱建物跡、中世の掘立柱建物跡・井戸・区画溝などが検出されている。さらに四方西野割遺跡(4)では古代の掘立柱建物跡、四方北塙遺跡(5)では古代から中世の掘立柱建物跡が検出されるなど、四方地区周辺は古代北陸道の磐瀬駅や中世以降の岩瀬湊との関連が注目される地域でもある。

神通川の旧流路を挟んだ対岸にあたる打出遺跡(6)では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡や掘立柱建物、平安時代の道路跡が検出されている。今市遺跡(7)では、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物、中世の館跡が近年の調査で検出されている。草島遺跡(8)は中世の埋蔵文化財包蔵地である。(常深)



第2図 四方背戸割遺跡と周辺の遺跡 (国土地理院発行地形図『富山』『富山港』1:25,000)

第三章 調査の成果

第1節 基本層序

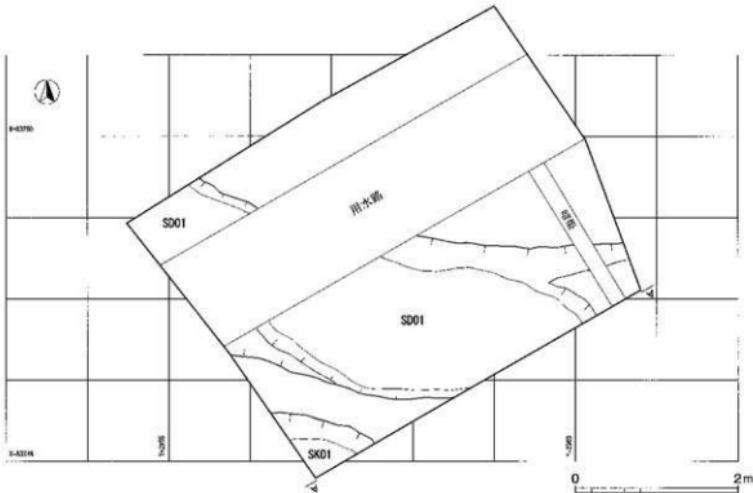
I層(黒褐色土、現代の水田耕作土、厚さ30cm)、II層(黒褐色土、旧耕土、厚さ30cm)の下にIII層(暗褐色土、遺物包含層の可能性、厚さ15cm)及びIV層(暗褐色土、厚さ20cm)が堆積する。遺構検出面であるV層(灰白色土)は南側へ向かって低くなり、シルトから砂質へと変化する傾向がある。

第2節 検出遺構(第3・4図、写真図版1・2)

V層上面で溝1条、上坑1基を検出した(第3図)。本来的にはIV層上面の遺構と判断される(第4図)。溝SD01は上幅1.9~20mを測る。概ねN~82°~Wの方位を示すが、緩やかな弧状に走向するか蛇行しているとみられる。下幅は1.45mである。北東部と南西部には底面より15~20cmの高さでテラス状の段があり、その部分では下幅が狭くなる。深さは南東壁断面で58cm、検出面で25cm前後である。地山のV層が南側で砂質化することと湧水により、掘削後の短時間のうちに遺構は崩れてしまった。覆土は上下2層あり、いずれも粘質土である。上層にのみ遺物(古式土器の破片約30点、図版2)が含まれ、溝の埋没時期を示している。土坑SK01は全容不明である。規模は1.2m以上で、深さは南東壁断面で38cm、検出面で18cmである。遺物は出土していない。覆土はSD01と異なって砂質土である。

第3節 出土遺物(第5図、写真図版2)

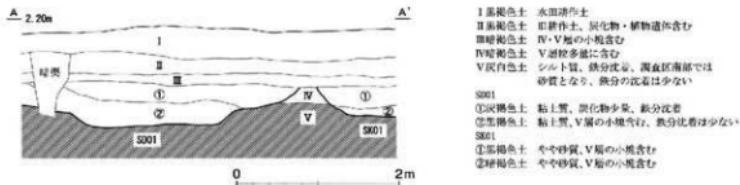
溝SD01から古式土器が出土している。破片数は壺4点・甕26点・高杯3点であり、うち5点を第5図に図示した。1は長頸の壺の口頭部で、わずかに有段の痕跡を留めている。口径は16.0cm。内面にミガキの痕跡が残る。2は甕の底部片である。底径7.2cm。3は甕の底部で、底径24cm。外向はケズリ後にハケメ、



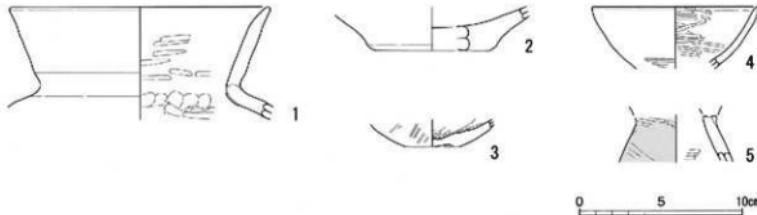
第3図 遺構全体図(1:60)

内面はナデである。4は高杯の口縁部で、口径10.2cmである。わずかに内溝し、内外面ともミガキを施す。5は高杯の脚部で外面はハケメ後にミガキ、内面は一部にミガキがみられる。外面は赤彩である。

この他に、Ⅲ層から埴型萍1点が出土した(写真図版2)。長径6.1cm、短径4.9cm、厚さ2.3cm、重さ96.86gである。着磁反応があり、表面に植物質痕がみられる。
(常深)



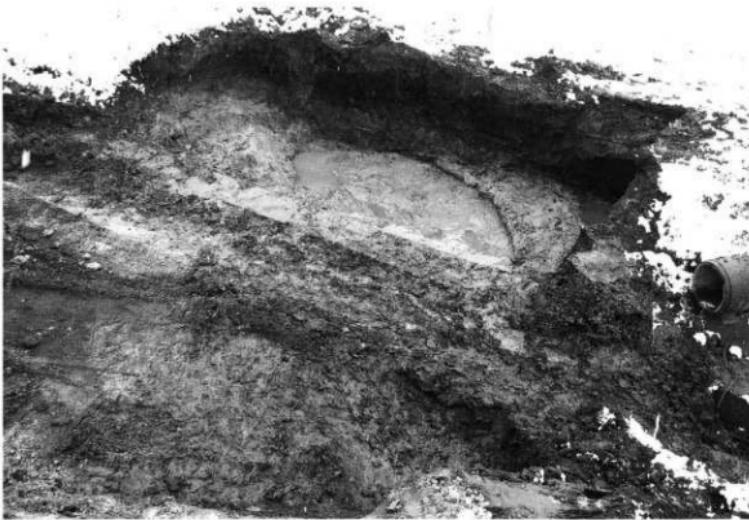
第4図 遺構断面図 (1:60)



第5図 SD01出土遺物 (1:3)

第IV章 総括

四方地区では弥生時代中期後葉には集落の形成が始まり(四方背戸削造跡)、洪水などによって後期の集落が一度埋没したのちに、古墳時代前期に再び集落が形成されるとされている(江代削造跡)。検出されたSD01は古墳時代前期に埋没した溝であり、これまでの知見に沿ったものと捉えられる。今回の調査地点は四方背戸削造跡の南辺にあって旧神通川の北岸に位置することから、居住域の外縁を区画するような溝であった可能性が考えられる。平成10年度に調査された1号溝は時期的にはSD01に先行するが、やはり造跡の東外縁にあって、規模や形状がSD01に酷似することから、同様の溝であったと考えられる。平成10年度1号溝近くで出土した台付装飾壺、打出遺跡の三連壺を含む土器群は、旧神通川河岸における古墳出現期の祭祀行為の一端を示すものと理解されるが、今回のSD01ではそのような祭祀行為の痕跡は認められなかつたものの、集落外縁部の様相を知る資料の一つになるものと考えられる。
(常深)



調査区全景（西から）



調査区全景（東から）



SD01 土壠断面 (北西から)



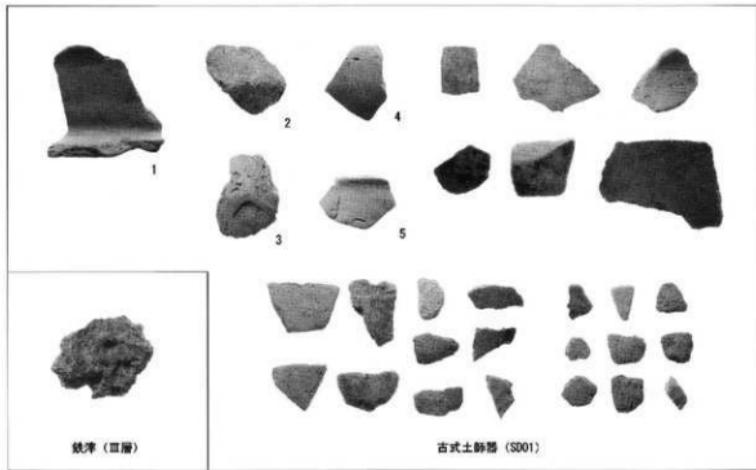
SK01 全景 (北から)



工事立会箇所 (西から)



遺構検出状態 (北東から)



出土遺物 (S:1/3)

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|---------------|----------------------------------|-------------|---------|-------------------|--------------------|-----------|-------------------|------|
| ふりがな | とやましむかたせとわりいせきはくつちようきほうこくしょ | | | | | | | |
| 著 名 | 富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 副 著 名 | 一般県道総合幹線道路総合交付金(住宅)付特農道工事に伴う発掘調査 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 富山市埋蔵文化財調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 53 | | | | | | | |
| 編 著 者 名 | 鹿島昌也・宮深尚 | | | | | | | |
| 編 集 機 関 | 有限会社毛野考古学研究所富山支所 | | | | | | | |
| 編集機関所在地 | 〒939-0351 富山県射水市戸波1679 3太閤山毛利館A | | | | | | | |
| 発 行 機 関 | 富山市教育委員会埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 発行機関所在地 | 〒930-0091 富山県富山市愛宕町1丁目2-24 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2013年3月15日 | | | | | | | |
| ふりがな 所取遺跡名 | 所在地 | コード | 北 緯 | 東 緯 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 | |
| | | 市町村 遺跡番号 | 。 | 。 | | | | |
| 四方背戸割遺跡 | 富山県富山市 四方荒屋 | 162019 | 201015 | 36° 45' 10" | 137° 11' 59" | 2013.11.8 | 20 m ² | 農道工事 |
| 所取遺跡名 | 種 別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特 許 事 項 | | | |
| 四方背戸割遺跡 | 集落跡 | 古墳時代 | 溝 土坑 | 古式土器 鉢 | | | | |
| 要 約 | 幅約2.0mの溝を検出し、覆土の上層から古式土器が出土した。 | | | | | | | |

富山市埋蔵文化財調査報告 53

富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告書

一般県道総合幹線道路総合交付金(住宅)付特農道工事に伴う発掘調査

発行日 平成25(2013)年3月15日

編 集 有限会社毛野考古学研究所

発 行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091 富山県富山市愛宕町1丁目2-24

電話 076-442-4216 Fax 076-442-5810

印 刷 中村印刷工業株式会社

